



【国語 A】

<考察>

平均正答率は東京都と比べて 2.8 ポイント下回っている。領域別では 4 領域すべてが都の平均より下回っている。特に「話すこと・聞くこと」が 5.5 ポイント、「書くこと」が 4.4 ポイント下回っており、比較的これらの領域で得点が伸びていない。一方、漢字やローマ字など言語についての知識・理解・技能は全国平均と同等である。

<授業改善のポイント>

目的や意図に応じて、書く事柄を整理する学習の積み重ねが必要である。また、目的や意図に応じて収集した情報を関連付けながら話し合い、メモを取り、文章を作っていく機会を多くしていく。本や文章、パンフレットやリーフレット、雑誌や新聞、音声や映像、インタビューやアンケートなど様々な情報の中から、必要なものを収集・選択できるよう指導していく。

【国語 B】

<考察>

平均正答率は東京都と比べて 2.5 ポイント下回っており、その理由として無答率が高かった。領域別では 4 領域すべてが都の平均より下回っている。特に「関心・意欲・態度」が 3.9 ポイント、設問別に見ると「目的や意図に応じて、グラフを基に、自分の考えを書く」設問が 10.3 ポイントと都の平均よりも下回っていた。一方「目的に応じて質問したいことを整理すること」「話の展開に沿って質問する」など話す・聞く能力についての知識・理解・技能は比較的全国平均および都の平均に近かった。

<授業改善のポイント>

全国平均と比べて最も正答率に開きが見られたのは、目的や意図に応じて、グラフを基に、自分の考えを書く設問である。したがって、観察したり、実験したり、調査等を行ったりして得られた結果などの事実を図表やグラフで示し、自分がどのように読み取って分析したのか、そこからどのような考えをもったのかを具体的に記述するような機会を多くしていく。その際、図や表、グラフの何に着目するのかや、図や表、グラフの中にある数値・言葉を使って自分の考えを書けるように指導していく。

[算数A]

<考察>

正答率は、都の平均79.4%、全国の平均77.6%に対して、学年75.7%と都の平均とは、およそ4ポイント、全国の平均とは、およそ2ポイント下回っている。正答率を領域別にみると、「数量関係」を問う問題は都の平均は下回っているものの、全国平均はやや上回っている。また、「数と計算」、「量と測定」の領域では、都の平均、全国の平均をやや下回っている程度である。それに対して「図形」の領域では、都の平均をおよそ9ポイント、全国の平均を5ポイントと大きく下回っている。

<授業改善のポイント>

正答率で特に下回っている「図形」の学習においては、具体物を用いた活動を通して、図形についての感覚を豊かにしたり、図形の性質を実感的に理解したりすることが大切である。指導に当たっては、系統性を意識した上で、上記の理由から具体物を用いた活動を多くとりいれていきたい。また、後に関連する内容を扱った際に、便宜活動について振り返り、素地的体験と知識とを関連付けることも大切である。例えば、1年生で学習した折り紙を切って形をつくる活動は、当該学年では図形の感覚を豊かにする素地的体験となるが、後の学年では正方形の内角の和の学習とかかわりが出てくる。正方形の内角の和について学習する際に、1年生での学習を振り返りながら、三角形の折り紙(180°)を二つ組み合わせると四角形を作ったことを振り返るなど、体験と知識を結び付けた指導をしていくことが大切である。

また、少人数指導で能力別に指導する内容や適正な人数の割り当てを検討することも必要である。

[算数B]

<考察>

正答率は都の平均49.8%、全国の平均47.2%に対して学年47.6%と都の平均とは、およそ2ポイント下回っているが、全国平均と比べると0.4ポイント上回っている。正答率を領域別にみると、「量と測定」、「図形」の領域は都と全国の平均をおよそ1~4ポイント上回っている。「数と計算」の領域は、都の平均を4ポイント下回っているが、全国平均と比べると0.4ポイントとわずかに下回っている程度である。「数量関係」の領域では、都の平均をおよそ2ポイント下回っているが、全国平均と比べると、逆におよそ2ポイント上回っている。

<授業改善のポイント>

都と全国の正答率の両方で下回っている、応用的な「数と計算」の領域の能力を高めるためには、日常生活の事象を数理的に捉え、式に表現する際には具体的な場面に対応させながら、図などに表すことを通して問題を考察することが重要である。そこで、日常生活の場面の中から児童にとって必要感のある場面をとり上げ、その場面を数理的に捉えて問題を解決する指導を充実させていくことが大切である。